

岡井隆と平成短歌 道券はな

○岡井隆 五首選

- 1、しやわしやわと陰囊ホーデンの髪洗ふときうしろに大きな冬の夜がある 岡井隆『ネフスキイ』2008年
- 2、つきの光に花梨が青く垂れてゐる。ずるいなあ先に時が満ちてて 岡井隆『ネフスキイ』2008年
- 3、もはやいかなるナシヨナリストも歩まざる林の枝を渡る夕光ゆうかげ 岡井隆『家常茶飯』2007年
- 4、食卓のむかうは若き妻の川ふしぎな魚の釣り上げらるる 岡井隆『E/T』2001年
- 5、怖かつたから嘔んだのだ自分たちを排除し続けるまつ白な指を 岡井隆『ヘテロリズム』以後の感想／草の雨』2004年

1、自意識の変化

掌てのなかへ降る精液の迅きかなアレキサンドリア種の曙に

岡井隆『眼底紀行』1967年

アトミック・ボムの爆心地点にてはだかで石鹸剥いている夜

穂村弘『ラインマーカーズ』2003年

ビニール傘の雨つぶに触れきみに触れ生涯をひるがえるてのひら

大森静佳『カミュー』2018年

2、独特の口調

浪漫的断片

泥ふたたび水のおもてに和なぐころを迷ふなよわが特急あづさ

岡井隆『鷲卵亭』1975年

何といふ顔してわれを見るものか私はここよ吊り橋ぢやない

河野裕子『日付のある歌』2002年

わたしもすぐくわかりますとふ相槌の、さうやつて呑まんでくれ

俺を 山下翔『温泉』2018年

3、植物の比喻

肺尖にひとつ昼顔の花燃ゆと告げんとしつつたわむ言葉は

岡井隆『朝狩』1964年

パク・クネの名にあやかほ 權あやかほといふ文字のひとつはありて寂しむわれは

大辻隆弘『短歌』2017年 一月号

あの人の敬語にすこし香るのが落葉樹だと気付いていれば

田村穂隆『湖とファルセット』2022年

4、相聞の変化

抱くとき髪に湿りののこりいて美しかりき野の雨を言つ

岡井隆『斉唱』1956年

きみを妻と呼ぶうるはしき屈辱を思ひつつ夕映の巷へ

荻原裕幸『甘藍派宣言』1990年

それは世界の端でもあつてきみの手を青葉を握るやうに握つた

荻原裕幸『リリカル・アンドロイド』2020年

5、時事を詠んだ歌

海こえてかなしき婚をあせりたる権力のやわらかき部分見ゆ

岡井隆『朝狩』1964年

一九九五年・三・二二、教団施設を強制捜査

押収のドラム缶にはあるらーん至福の砂糖こそあるらーめ

加藤治郎『昏睡のパラダイス』1998年

harassとは猟犬をけしかける声 その鹿がつかればはてて死ぬまで

川野芽生『Lifin』2020年

慰安所の扉に続く列がある 水溜まりを避けて途切れたる列

吉川宏志『雪の偶然』2023年

二〇二三年十月七日 未来・名古屋大会レジュメ

真顔のひと・岡井隆

山木礼子

一. 時間について

時間化（ツアイトウンク）の一場面よの、人の手がわが盃さかずきに影を注げる

「時間について」『夢と同じもの』

午後。庭園美術館。da Vinci展。

解剖図。わが絶望の久しかり櫟林くわんぎをぬけて帰らむ 「時間について」『ウランと白鳥』

*（ツアイトウンク）はZeitungの誤記か

一九九五年に「久しかり」と書かれた絶望はいつから生じたものか。初句に句点まで付けた思わせぶりに、櫟林が戦慄する。絶望がゆったりと広がっている。

二. 芸術、科学、生きることについて

梶の木のうへに灯れる大いなるランプ、みづからの軌道照らして

「さくらと彗星」『大洪水の前の晴天』

生レーベンの根底にある欲求の、それも西欧ゆづりといふか

「白鳥座見ゆ」『大洪水の前の晴天』

まこと真抱まことき締めたきはその午後につひに行かざりし櫟小林をばやし

「無でありしわたし」『臓器オルガン』

痕跡を残すな きみが生きてきていまある青い逆理さかへりに耐へよ 同

おそらくは素直で明るい歌が得意な歌人で、その美質のままに進めないところに作家の「軌道」がある。「根底」を模索しながら、明るさと同時に真顔の不穏をさらけ出している。たとえば冗談で身を守るように、この人は真顔をもって何かを守ろうとしていないか。岡井はどういう意味において時事を書いたか。

この時期、題材と方法という特異な二分法に、なおかつ技法の幅広さに目が向いて仕方がない。その明暗に、生をやめないヒロイズムに、心をひかれながら。

①帯のはづれかかった文庫本が見え、くらかばんだいつもの朝の 『馴鹿時代今か来向かふ』
岡井の歌は主に日常生活を題材としており、平明に表現された作品も数多い。しかしそれらが平板に陥らないようどの歌にもたしかな技巧が施されており、日常的な事物にほのかな象徴性を帯びさせている。

②自然ナトゥールに構造を見る意志だが待てよモスバーガーの昼食が先 『夢と同じもの』
硬いフレーズ、「かっこいい」表現(εx自然に構造を見る意志)を一首の核にするのではなく、俗なもの(εxモスバーガーの昼食)をぶつけて違和を発生させ、そちらの方をむしろ際立たせている。

③つきの光に花梨くわりんが青く垂れてゐる。ずるいなあ先に時が満ちてて 『ネフスキイ』
(口語というより)多彩なしゃべりことばが導入される。それはふと差し挿まれる意識の表現であり、緩衝や接着などさまざまな働きを担っている。この歌では上の句の非常に巧みな描写から、語り手のつぶやくような感慨に転ずる際に、「ずるいなあ」という語句が挿まれる。

④マラソンの女子の醜さを率直に言うぢやないの、濡るる折釘 『大洪水の前の晴天』
「マラソン」ではなく「マラソンの女子」という限定に、嫌悪感がはっきりと表れている。岡井の歌にしばしば詠み込まれる女性は、男性より劣ったものや、理解の外の存在として登場する。このような詠み方には古臭さを感じる。

⑤靖国つてよく判らない、判らなくてかまはぬ仕事のために行きぬ 『二〇〇六年水無月のころ』
自らを知らない側、力のない側に置こうとする意志が見られる。率直に、そんなわけがないだろうと思うし、岡井もそんなことは百も承知で皮肉として表現しているのだろう。しかし、権力の側にある者がこのような表現を用いることに批評性はあるのだろうか。

・比較対象として三首

愛は愛より生るる時間の長いよなあ帰つたら柿の実を見にゆかう 山下翔 『温泉』
洗脳はされるのよどの洗脳をされたかなのよ砂利を踏む音 平岡直子 『みじかい髪も長い髪も炎』

君の身体は君のものでも人生は人生は天皇に生きられて